

## 話線について——音と意味の分節

守 矢 信 明

## 0. はじめに

《彼は音痴である》というとき、「音痴」という言葉は、例えば「広辞苑」によると「生理的欠陥によって正しい音の認識と鑑賞と記憶ができないこと」とある。「音痴」に相当する英語、フランス語の表現はそれぞれ次のようになる：

He is tone-deaf.

Il n'a pas l'oreille musicale.

「広辞苑」では間接的に「耳」に問題があると説明しているが、こちらではもっとあからさまに《耳が悪い》と表現している。生理学上音痴というものがどう説明されるものなのか私は全く知らない、その不明を恥じるものの、その上でここに一つの素朴な疑問がある。それはこの世には「音痴の音楽好き」が少なからず存在しているということである。それで思い出されるのはあるアメリカ夫人のレコードになった歌である。彼女は大変な音楽好きであった。それもクラシックとかオペラが好きだった。熱意が高じて彼女の歌はレコードとなり、たちまちにしてベストセラーとなった。堂々たる歌唱、そして堂々たる調子ツ外れ、彼女は徹底した音痴だった。

そこで私の素朴な疑問に戻るが、この夫人は確かに正しい音程を保って歌うことはできないが、はたして正しい音の認識、鑑賞が同時にできないのだと断定できるだろうかということである。少くとも、彼女の再現する音が、彼女の耳に聞き取られ得たであろう音だとは思えない。なぜなら耳が把えた調子外れの音をそのまま口が再現できたのであれば、定義上、彼女は音痴ではなくなるのだから。

## 0.1 話を音楽の問題から言葉の問題に移してみたい。言葉にもまた「聞く」

と「話す」、すなわち音の聴取と音の再現という二面がある。そして音楽には音痴、味覚には舌痴という言い方があるが、言葉には少くとも「痴」と称されるようなものはない。それを指す言い方こそないが、一方通行の組合せは音楽や味覚以上にある：「聞く」のは駄目だが「話す」ことはできる；「話す」は駄目だが「書く」ことはできる；「書く」は駄目だが「読む」は得意だ、等。「聞く」「書く」「話す」の三要素の組合せだけで全部で8通りある。程度も考慮すれば無数である。音楽は歌えなくても聞くだけで成立つ。味覚は自分で作れなくても味うことはできる。しかし言葉は「書く」はともかく、「聞く」と「話す」はどちらが欠けても片手落ちで、コミュニケーションはかなりあやういものとなる。最近の言語教育では読む、書く、話すの一体化が標榜され実践されている。しかしなぜか「聞く」は除外されている。あるいは「聞く」は「話す」に含まれているのだろうか。多分そうだろう。しかし「音痴」の問題でひっかかりを覚える私は、「聞く」も、他の「話す」「書く」「読む」と肩を並べる言語習得の四要素の一つと見なしたいのである。つまり「聞く」は「話す」に併呑されるような問題ではなく、言語習得を目がけて相競う（三要素ではなく）四要素の一つと見たいのである。そうした視点から私は以下に主として音の面から扱った言葉の問題に言及してみたい。

1.0 まず「音痴」の所で触れた疑問が言葉ではどうなのかということをはっきりさせておきたい。先に音痴にあたる英語、フランス語の表現を挙げておいたが、次のやりとり<sup>(1)</sup>は、音楽とは無関係な言葉にまつわるフランス語の表現である：

—Mais elle prononce bien! 彼女なかなか発音がいいじゃないか。

—C'est qu'elle a l'oreille fine. なにしろ耳がいいからね。

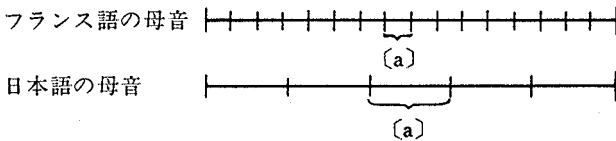
このやりとりの発想を支えているものは耳と口の密接な相関関係に対する合意である。ところで「発音がいい」とは「正確な発音」のことを指しているのか、それとも「美しい発音」のことであろうか。確かに正確さと美しさは別々の評価ではなく、同じ一つの評価（正確さ、すなわち美しさ）だと言えなくもない。しかしことが言葉に関するかぎり「美しさ」と「正確さ」は、矛盾はしな

いが、二つの別の事柄である。そして人の美的感覚を刺戟するような「美しい発音」はできるに越したことはないが、言語習得の上では不要である。必要なのは「正確な発音」である。その正確さとは、例えば日本語の場合、老若男女、悪声美声を問わず、ふつうに日本語を使ってコミュニケーションができる人々すべてにあてはまることである。これは非常に広い(ゆるい)概念である。おそらく広すぎて *critère* としては殆んど役に立たないほどである。ましてこの意味で「正確な発音」には「正確な耳」が必要かといえ、われわれの殆んどが日本語に関するかぎり *l'oreille fine* (繊細な耳) の持ち主であり、その程度のことであれば、なるほど「正確な耳」は必要である。もちろん言い換えれば、正確な発音に特別な耳は必要ではないということになる。

1.1 ところが、話が母国語である日本語から、他の外国語の習得についてとなると、以上の説明では何か物足りなく思われ、その通りではあるがあまり教えるところのない無駄なおしゃべりのようにも思えてくる。そしてまたぞろ具体性の仮面を被った「耳が良ければ口も良し」という神話の方が本当らしく聞こえてくる<sup>(2)</sup>。

確かに母国語を問題にするかぎり、殆んどの人々が正常な耳と口を持ちながら、母国語以外の言語を習得するとき、この正常さは必ずしも正常に機能してこないというのは経験的事実である。そこで正確な、とか、美しいといった実情のはっきりしない言い方をやめて、言語音の正体に迫る視点に立つ必要がある。例を《ラッパ》と《江の島》に取って考えよう。日本語には /r/ と /l/ の区別がないので、仮に [rappa] と発音しても [lappa] と発音しても意味の区別がない<sup>(3)</sup>。同様に《江の島》の「江」を [e] [ɛ] [je] [je] [i] [oe] のいずれかで発音し、「島」の「し」を [ʃi] [si] [su] [sɸ] のいずれかで発音するとすれば、24通りの組合せができるが、これらはすべて多少のなまりの印象を無視すれば、いずれも /enofima/ と処理(理解)されよう。variantes は音声上区別されても意味を区別する上では本質的ではない。しかし英語での rap [rap] と lap [lap], フランス語での chat [ʃa] と sa [sa] もしくは aimais [ɛmɛ] と aimé [eme] ではそれぞれが別の言語音となって、音のち

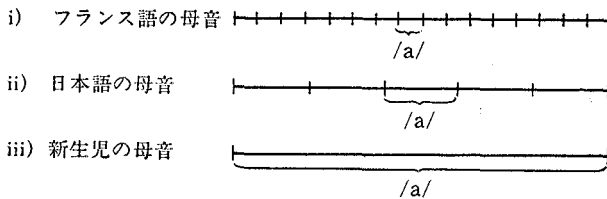
がいが意味の区別に役立っている。意味の区別に役立つ音、すなわち音韻は各国語で数が限られている。日本語では 21~22, フランス語では大体 36 である。そのうち母音は日本語の 5 に対しフランス語では 16<sup>(4)</sup>, と三倍強である。日本人がフランス語の母音を習う場合, さらに新しく 11 の母音を学ばなければならない計算になる。しかし言うまでもなくフランス語の母音 16 は, 日本語の母音 5+11 ではない。同じ [a] でもフランス語のそれは他の 15 の母音に対する [a] であり, 日本語のそれは他の 4 母音に対する [a] である (図 I)。



〔図 I〕

新しい音を学ぶというとき, 確かに印象の上ではそうも言えるが, 厳密には新しい音韻体系を学ぶというべきである。ということは新しい実質を学ぶというのではなく, 図 I から分るように, 全体における部分の位置づけを新しく学び直すということである。さらに言えばそれは実質ではなく組織法を学ぶのである。繰返して言えば, 言語音というのは個々の物理的な音声ではない, 物理音から得られる音韻という観念である。われわれがある言語音を認識し, それを記憶するとき, われわれは決してその音を孤立させて把えてはいない。一回性の物理音は聞いた途端に忘却させられると言っても過言ではない。ある言語音の identification (同定) は, それ自体の性質によってなされるのではなく, その言語の音韻体系の中の他の要素と異なることによって同定される。例えば {p, b}, {t, d}, {s, z}, {ʃ, ʒ}, {k, g} の音は合計 10 種の音である前に, 合計 5 種の音である。{ } で括られた各要素は実は調音 (運動) 上全く同じ音である。p と b を分けるものは p に特有の性質, b に特有の性質によってではない。声常のふるえの有無, その一点だけである。

1.2 音韻が体系化されるのは、その差異特徴による。異質なものの寄り集まりではなく、均質なものの分節であり、分節されたそれぞれは差異特徴によって対立し合う。この点に関して示唆的なのは、赤ン坊の母音である。赤ン坊、すなわち新生児は機嫌の良いときなどによくアーとかウーとかいう音を発している。これはよく聞いてみると実は [a:] とも [u:] とも [ɛ:] とも [o:] とも [i:] ともつかぬ、ぎわめて総合的な母音である。これを先の図式 I と合わせて考えた場合 (図 II) <sup>(5)</sup>, i) ii) iii) の相異はより総合的か、より分析的かの相異であって、ii) の /a/ は i) の /a/ のプラス  $\alpha$  を吸収し、iii) の /a/ は i) ii) のすべてを吸収している。つまり新生児の母音はフランス語と日本語のすべての母音を吸収し、日本語の [a] はフランス語の [a] の一部を吸収しえているが、フランス語の [a] は新生児のそれも、日本語のそれも吸収しえていない。逆に言えば、新生児の母音はフランス語と日本語のすべての母音を分析しえず、フランス語の [a] は新生児のそれも、日本語のそれも分析しうる、と言える。



〔図 II〕

新生児の母音は、分節がないという点で動物の吠え声、叫び声と同じく、言語の音とは言えないかも知れない。しかし胚胎期にある言語音であることは疑いない。彼は徐々に個別言語の（日本人なら日本語の）言語音を習得してゆくだろう。そしてその習得とは、新しい実質の習得（記憶）ではなく、すでに有する音の分節の仕方、組織の仕方であるということはすでに述べた。

2.0 新生児の総合的母音から個々の分節された単音への移行は、同時に言

語の二重分節 (double articulation) の習得過程でもある。Martinet は言語のメカニズムを二重分節という点から捉えた。話を進める上で、この二重分節という問題に立ち入ってみたい。

われわれが行なうコミュニケーションの過程というものは、大雑把に言って、A から B への何らかの経験事実の伝達である。言語はその経験事実を運ぶいわば箱である。ところでなまの経験というものは、いまだ分析の加えられていない均質の連続体である。話者はこの連続体である経験を、線条の不連続体のつながりに区切り、区切られた不連続体は聞き手にわたって元の経験に還元されてゆく。例えば頭痛がするとき、フランス語では：

J'ai mal à la tête.

と言う。頭痛という区切られない均質の経験が Je, ai mal, à, la, tête という6つの不連続体に変えられている。ここに使われている各要素は頭痛とは全く関係のない事柄を伝達する場合にも使われる。この経験を一連の意味をもった要素 (Martinet はこれを monème とよぶ) に区切るのが、第一の分節である。monème の数は理論上限られていないが、事実の上では有限である。

次にそれぞれの monème は音のレベルで弁別要素 (phonème) のつながりに分節されるが、これが第二の分節である。phonème の数はさらに限られたもので、Martinet の言葉を借りればほんの「二、三ダース」<sup>(6)</sup> である。

こうして言語のこの二重分節のおかげで、われわれは数千の monèmes を組合せて、無限の相異なる経験を表現することができ、またわずか数十の phonèmes を組合せることで数千の monèmes を区切ることができる。経験事実を《J'ai mal à la tête》と6つに分割するか、《頭 が 痛い》と3つに分割するかは、それぞれの言語体系の組織の仕方のちがいであって、経験とは何ら必然的つながりをもたない。また tête とはもともと「壺」という意味であって、「頭」を意味するから [te:t] という phonèmes を使わなければならない必然性はない。それを [atama] もしくは [to:] という全然別な phonèmes で表わすことも可能である。

## 2.1 かつて谷崎潤一郎はその名著『文章読本』の中で、「況や日本語になる

と、読み方などは日本人の間でもまちまちであり、その他総べての場合の規則が、あると言へばあるやうなものの、外国人にも分るように説明せよと言われると、出来ないものが沢山ある。西洋人が最も困難を感ずるのは、主格を現はすテニヲハの「ハ」と「が」の区別ださうであります。成る程、「花は散る」と言ふのと「花が散る」と言ふのと、明かに使ひ道が違ってをりまして、われわれならその場に臨んで迷ふことはありませんけれども、さてそれを、一般に当て嵌まる規則として、抽象的に言へと言へば出来ない。文法学者は何とか彼と説明を与へて、一応の体裁は取り繕ふでありませうが、そんな説明は実際の役に立たない。」と嘆いた。昭和9年の事である。それに対して文法学者の側からは、日本語についての完璧な文法書がないとは言えるが、日本語に文法がないとは言えない、という反論がいつでも用意されている。つまり「花が散る」と「花は散る」のちがいを潜在的に自覚しているか、顕在的な法則として自覚しているかという問題である。ただ残念ながら、日本語に対するわれわれの文法的自覚はあまりに潜在的で、他の外国語の学習の際にあまり役立って来ないというのが実情である。従って外国語を学ぶ最初に、日本語の「さ」はs+aの二音から成るといふことから説きおこすことは、ばかばかしいようだが大事なことになってくる。もう一つ、例を「促音のツ」と呼ばれるものにとって考えてみよう。次のような発話があったものとする：

《大阪の奥さんは「うちのひとは東京にいま行てる」と言ってる》

ここで、「行てる」と「言ってる」のちがいは「つ」の有無であり、われわれはそれを「つまる感じ」という印象で捉えている。その印象は正しい。しかし谷崎風に言えば、日本語を初めて学ぼうという者にとって、それは何の知識も与えてくれない。「さっき」「言った」「カップ」「一茶」「いっしょ」での「つ」の相異は調音運動上のちがいとして理解されなければならない。音響音声学的にはこれらの「つ」は閉鎖性+破裂性である。しかし調音運動上は別個の音がそれぞれ介在している。便宜上これらをローマ字表記すれば、sakki, itta, kappa, issa, iffo となる。二つ並ぶ同一子音中、まず当該の(kならk)子音が調音される。調音されるがそれは黙音のままであり、一拍おいてのちに発出される。われわれが「つ」と文字で表わすものは、音韻論的には

/saQki/, /iQta/, /kaQpa/, /iQsa/, /iQfo/ と表記される<sup>(7)</sup>。

「つ」の発音法をわれわれ日本人の殆んどが体得しながら、それを説明する知識を持たない。それは一面自然のなりゆきである。しかし知識があれば、次のようなフランス語の連鎖：

des habitants de toute la ville

personne ne travaille

par recourir à ...

を前にしても、わずかの連想でわけなく自然な対応（発音の上でも、聴取る上でも）ができるはずである。

2.2 二重分節という言語のメカニズムから言って、phonèmesは monèmesの識別素として学ばなければならない。母国語では phonèmesは monèmesの中に折り混ぜて学ばれるから、ただ単音としての把握だけでなく、今述べたような連鎖の中での把握も無理なく習得される。しかし成人が母国語以外の言語を学ぶとき、最初に phonèmesを一括して学ぶのがふつうであり、その方が言語の経済性（数十の phonèmesを組合せることで数千の monèmesが作られ、数千の monèmesを組合せることで無限数の経験が表現できる、という経済性）から言って理にかなっている。phonèmeの学習は、われわれの場合：

- a) 日本語にひきつけて、あるいはそれとの比較対象で教える
- b) 運動（調音）音声学的観点
- c) 理屈ぬきの imitation

のいずれか、もしくは混合方式で行なわれる。問題は種々様々にあるが、このレベルではまづまづの水準に達している、あるいは達しうると言える。だが驚くべきことには phonèmeより上の段階、すなわち monèmes, groupes de monèmes, phrases, discours (énoncés) のレベルでの学習が、事実上、完全に等閑に付されているのである。理由は二つ考えられる。一つは現在の語学教育が置かれている逆境（教材の不備、学生数の超過、等）、もう一つはこの方面の研究の遅れ、である。前者について述べることは本論の主旨ではない。



本論が追いつづけているのは後者である。

理屈の上では、その言語の音韻体系を構成する各要素、すなわち phonèmes を習得すれば、phonèmes によって区別される monèmes が、monèmes によって構成される groupes de monèmes が、そしてそれから構成される phrases が、最後に phrases によって構成される discours が理解されるはずである。だが周知のように事は理屈通りには行っていない。逆境が順境となって、訓練につぐ訓練を積みばあるいは理屈通りに運ぶかも知れない。ただその日が来る前に、もう少し理屈の面で疑問をもち、その疑問を解明しておく必要がある。

2.3 ここに興味深いテストの結果がある。私の受持つフランス語の A クラスの諸君 (53名) に次のような日本語を口述し、聞こえた通りに書き取ってもらった。口述は二度行ない、一度目に書き取り、二度目に訂正があれば訂正をしてもらった。日本語文は次の通り：

《むかし、にわとりのたまごは男がひろい、ひらったたがも<sub>1</sub>は女が売った。たまごはバック、あの、女性がかまみの前でベタベタぬるバックと<sub>3</sub>しても使われる。

この話は文福茶まが<sub>4</sub>に出てこない。》

これと同じテストを B クラス (60名) でも行ない、さらに C クラス (24名) では次の文例で類似のテストを行なった：

2. コロンブスのたがも
3. かがみよ、かまみ
4. 文福茶まが

以上の結果は表の通りである (数値はパーセンテージ)。(表で、+はすべて「聞き分けた者」を示し、-については、1が「ひろい、ひらった」とした者、2が「たまご」とした者、3が「かがみ」とした者、4が「茶がま」とした者を示す。) この結果から分ることは、読まれた通りに聞き取った学生が圧倒的に少ないという事である。殊に2, 3, 4では大半の者が音の奇妙な組合

## テ ス ト の 結 果

		A クラス		B クラス		C クラス	
		+	-	+	-	+	-
1	1°	34	64	88	12	/	
	2°	42	57	88	12		
2	1°	0	96	0	100	43	57
	2°	0	92	2	98	83	17
3	1°	0	96	0	100	35	65
	2°	0	85	7	88	39	61
4	1°	0	94	8	92	26	74
	2°	17	79	20	80	30	70

せに気づいていない。口述者がふつうのスピードで、しかし明確に、大声で読みあげたにも拘らず、である。Cクラスの場合は比較的小人数で（ということはクラス全体の集中力が高まる）、話線が短かった（ということは、集中の努力が比較的少なくてすむ）ことが原因して、A、Bクラス程+-が極端に分れていない（それでもやはり一のパーセンテージの方が高いことに注意）。

このテストの狙いが [ra] か [la] か? といった日本語の音韻以外の音の聞き分けを試したのではなく、「tagamo」か「tamago」かといった、日本語で認められている音韻どうしの、組合せのちがいを聞き取れるかどうかを試すことであったことは明らかである。しかしながらテストの結果は先に見た、

[œnosima]  
 ∴ ⇒ /ɛnoʃima/  
 [enosɸma]

のように音声-音韻間に見られるのと同じ収斂現象が、

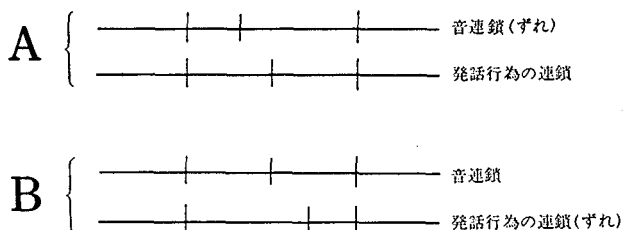
[tagamo]  
 ∴ ⇒ /tamago/  
 [tamago]

のような monème のレベルにも起り得ることを示している。なぜそうなるかについて、学生の集中力の欠如を責めることもできよう。しかし、むしろ聞き

分けをしない方が自然だとするなら、原因は他に求めるべきである。視覚におけるパターン認識というものが聴覚にもあるのかも知れない。だが話を元に戻して、弁別要素としての phonème は monèmes を区別するのに役立つということのを思い起こすとき、[tagamo] を /tamago/ と処理（理解）した人々は、口述される日本語の言表が、先ず何よりも第一に意味のある言表であろうという共通の誤解に立っていたということである。テストの際の問題の出し方が、もし「次の各音は似ているがちがう音です。それぞれの各組を聞き分けなさい：1. タマゴとタガモ、2. …」というようなものであったなら、結果はまた別であったろう。

2.4 実を言えば、テストに使われた「タガモ」と「カマミ」は、かねて二歳の幼児から採取しておいたものである。この幼児の場合は、正常な音連鎖「カガミ」が正常でない「カマミ」という連鎖として把握されていた。回数を重ねても、「カー・ガー・ミ」と引っ張って教えても「カー・マー・ミー」となってしまう、そうした期間がほぼ一年近く続いた。「タガモ」についても同様である。

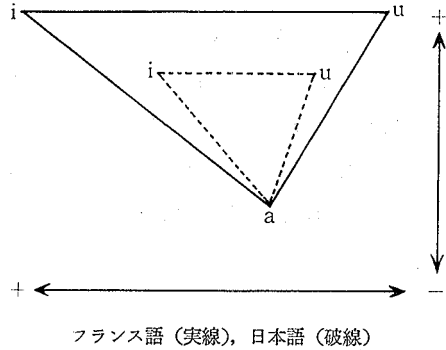
さて、先のテストを受けた学生諸君と、二歳児の場合とでは、反応の立場がそれぞれ逆である（タガモ $\leftrightarrow$ タマゴ）。だが両者には共通して、音連鎖 (la chaîne des sons) と発話行為の連鎖 (la chaîne des actes de parole)<sup>(8)</sup> のずれがある。学生諸君の多くには音連鎖に対する受け取り方にずれが見られ（これを A タイプのずれ、とする）、二歳児には発話行為の連鎖に対するずれ



〔図Ⅲ〕

が見られる（これを B タイプのずれ，とする）（図Ⅲ），B タイプのずれは調音運動がうまく運ばないことに帰因し，典型的には早口言葉の場合に見られるが，外国語の学習の場合に

も時折見られる。調音器官（舌と唇）の運動量を日本語とフランス語で対照的に図式化すれば（図Ⅳ），フランス語の運動量の方がはるかに多く，かつ激しいことが分る（垂直線は上に行くにつれ舌の位置が上がる。水平線は十方向が平唇



〔図Ⅳ〕

化，一方向が円唇化を示す）。日本語の口の動きに慣れている者にとって，左右前後に口を開くこと自体が極めて難しい。たちまち B タイプのずれを経験することになる。しかし今，「時折」と言った。というのは実際には学生が慎重で，間違いをおそれるあまりゆっくりと，かみしめるように発音を試みるからである。むしろずれ易い自らのマイナス面を一日も早く克服して，自然なスピードでの調音活動ができるようにするべきであるのに，修得よりは失敗の方をおそれている。そのため，毎年授業の始めには，目では読めても口では読めぬ例として，例えば「少女シャンソン歌手」のような言葉を発音させ，フランス語音の修得に必要な唇の緊張，舌の動き，声量の重要さを自覚させようとするのであるが，大抵はかぼそい小声で，かみしめるように，間違わずにノ読まれることが多く，鼻白む結果となる。そのほかに，最近耳にした B タイプの例では《ティーム・チャーチング》というのがある。team は殆んど日本語化して「チーム」と発音するのがふつうであるが，teaching の方はまだ一般化していない。教養もかなり高いその人は，japonglais（和製英語）を嫌って team を「ティーム」としたまではよかったが，[t-t-t] の連続に舌を巻かれて「チャーチング」とつないでしまったわけである。

次に A タイプのずれであるが，こちらの例としては，フランスの詩人

Mallarmé の名を マラメル と記憶してしまった人がいた。この人が友人と Mallarmé の詩について議論した。マラルメは、いやマラメルは、と口角沫を飛ばしての白熱した議論が続いたが、ついに相方とも「マラメル」の不自然さには気がつかなかったというものである。マラメルに限らず、おそらくわれわれ自身、間違っただけで記憶してしまった語の聴覚映像というものを、必ずやいくつか隠し持っているはずである。出来合いのあり得べき例としては [egzamẽ] を [egzamã] (examen), [lẽgũist] を [lẽgist] (linguiste) など。A タイプのずれはいずれにせよ無知と誤解のなわばりである。

3.0 A, B タイプのずれはなぜ生ずるのだろうか。言うまでもなく単独音ではこの種のずれは起り得ない。事がすでに話線の段階にあるからである。一つの要素が二つになる、ということは、話線になるということである。そして一つの要素が二つになるというだけで、すでに関係が生じ、規則が生じたのである。

同じ音には同じ発声行為が対応するはずであり、その逆も言えるはずである。ということは音連鎖を断ち切っていったとき、そこに対応する発声行為が見出せるはずである。だがこの事は何によって認証されるのであろうか。この点に関し Saussure は次のように述べている：

「われわれが *b* とは何か、*t* とは何か、などを知るのは、耳によるのである。かりに映画の手段をもって、音連鎖を遂行中の口や喉頭の運動をのこらず再現しえたとしても、こうした分節運動のつづきのなかに下位区分を発見することは不可能であろう；ある音がどこに始まり、他の音がどこに終るかわからない。聴覚印象がないとしたら、たとえば *fal* には単位が三個あって、二個でも四個でもない、どうして断言すべきか？ある音がおなじ音として続いているか、いないかを、ただちに知覚することができるのは、耳にした言の連鎖のなかである」<sup>(9)</sup>

ここで述べられていることは、音連鎖の中の単位を認知しうるのは、耳にした言の連鎖、すなわち聴覚印象にたよるほかはないということと、もう一つは分節運動のつづきの中に単位の区分を見出すことはできない、ということであ

る。忘れてならないのは、今問題になっているものが、単音ではなく話線だということである。すると、発声運動の連鎖には区がないのであろうか？ Saussureは「ない」と言っている。そしてここに述べられた見解を Jakobson が再び取り上げて「慧眼」と評し、次のように述べている：

「ソシュールの死後およそ20年たって、彼が見ることを望んだにちがいない映画が実現された。ドイツの音声学者パウル・メンツェラートが、トーキー映画を使って音声装置の働きをレントゲン撮影したのである。そしてこの映画はソシュールの予想を完全に立証した。[...] 伝統的な学説は、安定した持続部を含む持続音 *son de position* と、持続部を欠いていて、ある位置から他の位置へ移る際に現われるわたり音 *son de transition* とを区別していたが、二人の音声学者 [メンツェラートとアルマンド・ラセルダ] は、あらゆる音が実際にはわたり音であることを示す。」<sup>(10)</sup> (下線は引用者)

これは実に驚くべき発見である。確かにスペクトログラフやオシログラフが示す音声の図は、われわれ素人にはどこにどの音が対応しているのか全く伺い知ることのできない、混沌の世界である。しかしここに指摘されているのは物理的な音声の記録などではない。調音運動そのものである。もう少し引用を続けることを許していただきたい：

「言連鎖に関していえば、彼らはなおいっそう逆説的な主張に到達する。厳密に調音的な観点から見ると、音の継起性は存在しない。継起するかわりに、音は絡みあっているのだ。そして音響印象によれば他の音に続いているはずの音が、この前者と同時いや、部分的にはそれ以前に調音されることがあるという。」<sup>(11)</sup>

Jakobson も Saussure も、このあと、自らの言語学者としての職務に従って、音韻論としての音素材の組織原理を索めるわけであるが、本論では音声学と音韻論の入り組んだ関係にあらためて立ち入るつもりはない。本論にとって二人からそれぞれ長い引用をしなければならなかったのは、次の点を明らかにしたかったからである。つまり言葉を話線という面から把えるとき、音連鎖（現実には聴覚印象）も、発話行為の連鎖（すなわち調音運動の連鎖）も、と

もに全体としての一対一対応はあるが、個別的な一対一対応に分析することはできないということである。これは同時に、音痴の問題から始めた本論の、ひとまずの結論である。

4. 最後に、この一応の結論に対して補足をしておきたい。私は言語習得において「聞くこと」の意味を絶えず念頭に置きながら、問を発し、答を求めてきた。そして今、一応の結論を（形を変えた、これも問であるが）出した。この結論を「聞こえないものは話せず、話せないものは聞こえてこない」というふうに誤解されては困る。

「聞く」を核に据えて考える場合、一つには「聞こえる」ための調音の学習、すなわち話線の発音法を明らかにすべきだろう。例えば、先の Jakobson の引用にもあったように、フランス語では事実上、子音の発音時に後続する母音の唇の形が先取りされるといことがあげられる<sup>(12)</sup>。また、二要素間の依存関係の例としての assimilation の問題。あるいはフランス語音のくっきりした聴覚印象を説明するための、休止状態から子音を調音させる訓練など。

もう一つは、あまりに大きな問題であるが、音から意味への問題である。だが手がかりがないわけではない。例えば Bally が言う「意味のリズム」としての oxyton リズムである。<sup>(13)</sup> それらについては別の機会に稿をあらためて述べてみたい。

## 5. 終りに

本稿には術語の不統一、ならびに人名表記の不統一がある。前者については、必ずしも術語を統一する必要を、論旨の上で感じなかったこと。必要がある場合には元になる原語を示した。人名については、翻訳者の表記を引用上尊重したこと。以上二つの点をお断りしておきたい。

### 註

- (1) 文例は佐藤房吉「こんなときフランス語でどう言うか」(評論社)より。
- (2) 口と耳の問題の短絡は、例えば A. Rebou 編 Guide pédagogique pour le professeur de français langue étrangère (Hachette) pp.60-61 にも見られ

- る。
- (3) 簡略な音声表記を [ ] で、音韻表記を // で示すものとする。
  - (4) semi-voyelles も含めてある。なお [œ] [ɛ̃] および [a] [ɑ] の区別を認めないとすれば14種類である。
  - (5) 新生児の総合的母音を /a/ と設定するものとする。
  - (6) A. マルティネ「言語機能論」(田中春美他訳)(みすず書房), 25ページ
  - (7) 服部四郎「言語学の方法」(岩波書店), なお同著「音声学」(岩波全書) 170ページでは /Q/ の代わりに /ʔ/ が用いられている。
  - (8) cf. M. Grammont, *Traité de Phonétique*, p.10 (Librairie Delagrave)
  - (9) F. de Saussure, *Cours de linguistique générale*, pp.63—64, 引用文の訳は小林英夫訳「一般言語学講義」(岩波書店) 59—60ページ
  - (10) R. Jakobson, *Six leçons sur le son et le sens* (Les Edition de Minuit) pp.29—30, 引用文の訳は花輪光訳「音と意味についての六章」(みすず書房) 34—35ページ。
- (11) 同上
  - (12) cf. A. Rigault 編 *La grammaire du français parlé* (Hachette)
  - (13) Ch. Bally, *Linguistique générale et linguistique française* (Editions Francke Berne)